

## 連載 13 海を越えた日本映画 衣笠貞之助監督『十字路』

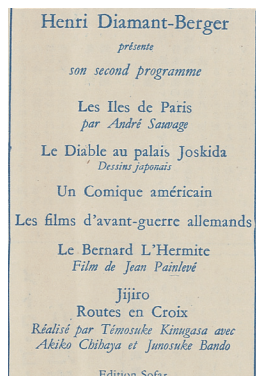
5月は映画界にとってはカンヌ映画祭の季節だ。今年もレッドカーペットを歩んだ日本の監督や俳優たち、是枝裕和監督や北野武監督が話題となった。

日本映画がヨーロッパの常設映画館にかけられたのは、衣笠貞之助監督『十字路』（1928年）が最初である。『狂った一頁』（1926年）の二年後に封切られた『十字路』を持って衣笠監督はヨーロッパに渡った。

国内では、興行的には成功といいがたい『狂った一頁』がそうであったように、『十字路』もまた、毀誉褒貶かまびすしかった。「毀誉相半ば」と保留しつつ、岩崎昶は「ともあれ、衣笠貞之助は「十字路」を日本の映画界に贈ったことを誇つていゝ。そして日本の映画界も「十字路」を持つことを世界の市場に向つて自慢していゝ」と述べ、「興行価値——一流館向き的高级映画」と評価した（『キネマ旬報』1928年6月11日）。5月11日新宿武蔵野館封切とあるから、洋画専門の一流館である武蔵野館には適した作品ということになる。

『十字路』は、時代物ではあるが、ほとんど剣戟（チャンバラ）シーンを廃し、表現派風に歪んだセット、これも表現派風の匿名化された登場人物、回転イメージなど象徴的なカットを駆使して展開する。貧しい姉と弟が、狡猾な世間に裏切られ、欺かれ、翻弄されて狂おしくも滅びて行く、暗い色調の作品である。

矢野目源一は「衣笠貞之助氏の「十字路」がフランス映画界に与へたる印象……」（『キネマ旬報』1929年4月21日）と題して、「ヌーヴェル・リテレル」紙、同年2月23日のアレキサンドル・アルヌワの記事を抄訳している。



フランスでの「十字路」  
上映プログラム

スチユディオ・デイヤマン  
で見た「十字路」Routes en  
croixの前には、われわれの  
付度をはるかに超えた大作  
品であつたことに頭が下つ  
た。(略) 貧しい身分の人達  
の物語である。(略) ロマネ  
スクなリアリズムの作品の  
一種である。(略) 日本では



『十字路』のワンシーン

黙説法の練達したものが名優の資格である。心から心へ首の動かし方一つでも無量の情感を伝える神技とも言ふべきものがある、彼等は叫ばない。凝視する力強い瞳の中にカタストロフの万華鏡を籠めてゐるのである。日本人の精神的演技をわれわれ西欧人は学ぶべきではないのか。

武田忠哉は「「十字路」がドイツ映画界に与へた印象」（『キネマ旬報』1929年7月21日）を書いた。ドイツでは「ヨシワラの蔭にて」というタイトルで、1929年5月17日にウーファ・パヴィオンで封切られた。それに対する反応は、まず「ロカール・アンツァイガア」紙では「日本の映画インダストリが、一九二六年に、約七九〇の映画を——即ち、同年におけるアメリカよりも、遙かに多く——生産したことを、もしドイツ人が聞かならば、誰でもそれを信じまいとするだらう。併しながら、日本の内務省の検閲報告に記載されてゐるやうに、これは全く事実」と紹介が始まる。「内務省の検閲報告」を参照するあたり、油断ならない。それはさておき、ドイツの映画ジャーナリズムでは、表現主義の影響よりも、ロシアの影響を指摘する批評が目につく。「国際的——特に、ロシヤ的」（「ディー・ヴェルト・アム・モンターク」紙）。「監督手法と撮影は、明らかに、ロシヤ人から影響されてゐる（略）クローズ・アップ、画面のカット、カメラの移動、群衆と個々人の指揮、それらを受け継いでゐるのだ」（「フィルム・ジャーナル」紙）。「技術的に云へ

ば、決して古代日本的でなく、ウルトラ・モダンなのであり、構図とモンタージュに於て、第一流のロシア人を思ひ起こさせ」る（「ベルリナア・モルゲンポスト」紙）。

衣笠貞之助は、モスクワ経由でドイツに入国しており、エイゼンシュテイン、プドフキンらの大物と会っている。彼等の影響を受けたという評価は事後的につくられた印象かもしれない。それにしても、ドイツのジャーナリズムは、衣笠映画の撮影技法、編集方法だけではなく、おそらく階級意識といったものにも、ソビエト・ロシアのアヴァンギャルドに通じるものを見てとったようなのである。



『十字路』DVD のパッケージ  
(ディスクプラン販売)